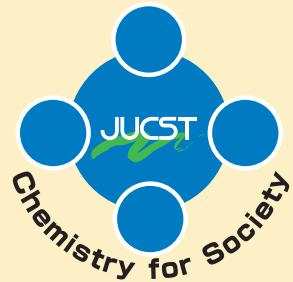


International Year of
CHEMISTRY
2011

日本化学連合 世界化学年 2011 記念事業 報告書



平成 24 年 4 月

一般社団法人 日本化学連合

目 次

| | |
|--|----|
| 1. 日本化学連合による世界化学年記念事業について | 1 |
| 1.1 世界化学年記念事業を終えて 日本化学連合会長 御園生誠 | 1 |
| 1.2 世界化学年日本委員会の発足の経緯 | 4 |
| 1.3 世界化学年日本委員会発足時の野依良治委員長の挨拶 (世界化学年日本委員会ホームページより転載) | 5 |
| 2. 世界化学年カウントダウン記念シンポジウム | 9 |
| 2.1 事業実施概要 | 9 |
| 2.2 世界化学年カウントダウン記念シンポジウム プログラム | 10 |
| 2.3 シンポジウム会場の様子 | 11 |
| 2.4 シンポジウム企画委員 | 12 |
| 3. キュリー夫人科学伝記読書感想文コンクール | 15 |
| 3.1 事業実施概要 | 15 |
| 3.2 最優秀賞と優秀賞感想文の紹介 | 19 |
| 3.3 駐日ポーランド大使館での感想文コンクール表彰式 | 26 |
| 3.4 キュリー夫人科学伝記読物感想文コンクール表彰式の様子 | 28 |
| 4. 世界化学年記念化学コミュニケーション賞 | 33 |
| 4.1 事業実施概要 | 33 |
| 4.2 化学コミュニケーション賞表彰式 | 35 |
| 4.3 化学コミュニケーション賞表彰式の様子 | 36 |

編集後記

1. 日本化学連合による世界化学年記念事業

1.1 世界化学年記念事業を終えて

一般社団法人 日本化学連合会長
世界化学年日本委員会副委員長
御園生 誠

日本における世界化学年が立派に終了したことを心より嬉しく思う。世界化学年日本委員会の事務局を務めた日本化学連合の会長として、また、日本委員会副委員長として、ご協力頂いた皆様に心よりの謝意を表明したい。

日本化学連合が 2009 年に事務局を引き受けこととなり、事業、組織、予算について関係者との非公式な検討が始まった。ちょうど化学オリンピックの時期と重なったので、新たな募金はしないことを前提とせざるを得なかった。そこで、考えたのが、化学連合のメンバー団体はじめ化学関連の学協会諸団体に呼び掛け、それぞれに世界化学年の趣旨に沿った企画を実施して頂き、日本化学連合がその連絡調整と広報を担って、全体として統一した世界化学年のイメージで、その趣旨や活動をアカデミアはじめ社会に対して発出できることである。この基本方針は、関係者の協力があり、結果的にうまく機能したと思っている。

実は、これらのことが正式に決まったのが、かなり遅れた 2010 年 8 月の世界化学年日本委員会の発足とその記者会見である。このスタート自身は官産学の権要な多くの方々に参加頂くことが出来、立派なものであったが、すでに世界化学年まで半年しか無く、時も金もない視界なしのスタートであった。とりあえず、日本化学連合は、世界化学年の事務局業務と独自事業にその予算と人的資源のほぼすべてを振り向いた。それでも、実行委員会から世界化学年の目玉になる事業を早期に実施するよう依頼されたので、フル回転でも間に合わない状態であった。

その結果、日本化学連合は、相当の無理を覚悟で先陣を引き受け、事務局業務に加え、3つの事業を独自に実施した。まずは、カウントダウンシンポジウム(2010 年 12 月)である。予定していた法人化記念行事を急きょ世界化学年向けに変更したのだが、アカデミア、官界、産業界の力強い支援を得て立派なスタートをきることができた。とくに、実施に協力頂いた先生方、理化学研究所、科学技術振興機構のご支援を感謝したい。鈴木、根岸両ノーベル賞受賞者のご挨拶を頂くことができた。

第 2 は、キュリー夫人科学伝記読書感想文コンクールである。2010 年 12 月より全国の小中学生からの感想文を募集し、長い選考過程を経て、8 月に印象深く素晴らしい表彰式をポーランド大使館で開くことができた。ご支援いただいたポーランド大使館、中学、高校の先生方、世界化学年大使の方々、科学技術振興機構、化学工業日報社に心よりの謝意を表わしたい。野依日本委員会委員長および多数の受賞生徒とその保護者の方々の出席が授賞式を盛り上げたことを付記しておきたい。

最後は、化学コミュニケーション賞である。やはり長い選考を経て、化学と社会のコミュニケーションに貢献した個人・団体を10月に表彰することができた。これも、日本化学連合の法人化の記念行事として早くから検討していたものであるが、世界化学年を盛り上げるべく、急きょ世界化学年の行事として実施したものである。関連して、化学工業日報社より『化学コミュニケーション』を上梓した。

この2年間、実に多くの団体、個人から数え切れないほどの心温まるご厚意や財政的支援を頂いた。これらの支援がなければ全く不可能な世界化学年であった。改めて深い謝意を表するとともに、よく無事に終了できたものと安堵する。

以下に、2010年12月のカウントダウン記念シンポジウムに際して、日本化学連合会長として、また日本委員会を代表して行った挨拶を再掲して、その時の気持ちをお伝えすることにしたい。世界化学年の精神と活動が今後とも引き継がれ「社会のための化学」が一層発展することを願う。

「世界化学年を来年に控えたカウントダウン記念シンポジウムの開催に当たり、世界化学年日本委員会、日本化学連合を代表して一言ご挨拶申し上げます。

2011年はキュリー夫人がノーベル化学賞を受賞してから100年目にあたります。わが国も共同提案国となりIUPACを通してUNESCOに働きかけた結果、国連総会において世界化学年とすることが決められました。キュリー夫人は、夫ピエールとともに放射能の研究で1903年ノーベル物理学賞を、その後、ラジウム、ポロニウムの発見と研究で1911年化学賞を受賞しています。また、彼女の死の翌年1935年、共同研究者でもあった長女のイレーヌとその夫ジョリオも人工放射能の研究でノーベル化学賞を受賞しています。

さて、世界化学年にあたり、わが国では、世界化学年日本委員会を組織し、化学に関連する多くの学協会、府省庁、団体のご協力ご支援のもとに、日本化学連合が主として事務局を担当して準備を進めているところです。諸外国において多くの企画が進められております。お陰さまで、世界化学年を1か月後に控えた本日、カウントダウン記念シンポジウムを開く運びとなりました。ご協力頂きました諸機関・団体の皆さんに厚く御礼申し上げます。

世界化学年は、ポスターにありますように、化学に対する社会の理解増進、若い世代の化学への興味喚起、創造的未来への化学者の貢献、女性科学者の支援の四つを世界共通の目的に掲げ、Chemistry – our life, our futureを合言葉にしています。

キュリー夫妻の成果は、科学の新分野を拓くとともに、病気の治療を通して社会に多大な貢献をしました。キュリー夫人が第一次大戦中先頭に立って治療に努めたことはよく知られています。彼女たちの研究は、その後、原子力発電、材料開発などにつながり社会の福祉に貢献しましたが、他方で、核兵器への道にもつながったともいえます。

科学と社会の関係と科学の責任については、これまでに多くの議論がありますが、今では、科学が使い方によって善悪両面のあることを、科学に携わるもののが十分に留意し、その結果に適切に発言し、責任を

持つことは当然のことになっています。とりわけ近年、人類は、人口、気候、資源、エネルギー、貧困など地球規模の多くの難題に直面し、また、国内的にも産業活性化が喫緊の課題となる中で、化学を含む科学の責任には一段と重いものがあります。化学が社会の中にあることを再確認し、化学が適切に社会に貢献する道を社会とともに考えることが、世界化学年の大いな役割でありましょう。

世界化学年の活動を通して、化学が、これらの問題の解決に貢献しうるものとして社会と化学者コミュニティの双方で再確認され、また、文化としての化学の面白さを理解されることを祈念しております。我々化学に携わるものは、そのため、十分な貢献ができると信じており、また、一層の努力をする覚悟ですので、関係各位のご理解ご支援を心よりお願い申し上げます。

さて、日本化学連合についてですが、本年、一般社団法人となりました。現在 17 学協会が会員となっており、重複を除いて約 8 万人が参加しています。その目的とするところは、まさに上に述べた、化学者コミュニティと社会との対話を通して、われわれ化学者・化学技術者の考え方を社会に理解して頂くと同時に、社会からのご意見を聞いて化学・化学技術の今後の進め方に活かし社会に貢献していくことです。従いまして、日本化学連合にとっても世界化学年はたいへん重要な事業であると考えております。

わが国の世界化学年は関連学協会、団体の自主的企画を中心として進めることとしていますが、日本化学連合においては、これら企画の連携調整をするとともに、小中学生を対象とするキュリー夫人伝記読書感想文コンクールの開催と化学の啓発に貢献をされた個人・団体に化学コミュニケーション賞を差し上げ顕彰することを予定しております。世界化学年を機会に、日本化学連合の存在もご理解いただき、これらの事業についてもご支援下さいようお願い申し上げる次第です。

最後に、関係各位のご支援により世界化学年が意義深く実りのあるものになることを願い、また関係各位のご支援に対し改めて感謝申し上げ、挨拶とさせていただきます。」



一般社団法人 日本化学連合会長
東京大学 名誉教授 御園生 誠

1.2 世界化学年日本委員会の発足の経緯

2010年8月6日に、わが国における「世界化学年」(International Year of Chemistry:IYC2011)を企画・実行する主催組織として、野依良治 理化学研究所理事長を委員長とする「世界化学年日本委員会」が設立されました。

わが国においては、化学関係の学協会・諸団体をはじめ大学や産業界(以下、化学関係団体という)が既にこの趣旨・目的に沿った活動を長年にわたり展開してきており、例えば2010年7月には国際化学オリンピックを東京で開催するなど、高校生を含め広く化学の啓発と人材育成に努めてきています。そこで、世界化学年日本委員会のもと、产学研が団結してこれら『化学関係団体が賛同して開催する事業』を強化・発展させるとともに、「世界化学年」オリジナルの事業として『新しい事業』が数々計画されました。

IUPACに対する日本代表機関である日本学術会議(化学委員会)は世界化学年を我が国において推進するため、日本化学連合に対して事業を具体化する準備を付託するとともに、日本化学会はじめ化学系学協会に協力を要請しました。これをうけて、世界化学年日本委員会が2010年8月に設立され日本化学連合は日本委員会の事務局を担当することとなりました。なお、世界化学年日本委員会は下記の委員で構成され、日本化学連合は副委員長として御園生誠(日本化学連合会長)、委員並びに実行委員会委員長として西出宏之(日本化学連合副会長)が委員会に加わり、活動を続けてまいりました。

日本化学連合は「世界化学年」を通して、化学の一層の振興と社会への幅広い普及・啓発を図るとともに、わが国の科学・技術が一層振興し、持続可能な社会を支える人材の育成と増進が図られ、わが国の力強い将来に貢献し、輝く「化学の年」となることを願っています。

世界化学年日本委員会委員

(所属名と役職名は2010年8月時点)

| | | |
|------|--------|-------------------------|
| 委員長 | 野依 良治 | 理化学研究所理事長 |
| 副委員長 | 岩澤 康裕 | 日本学術会議第三部長、日本化学会会長 |
| 副委員長 | 御園生 誠 | 日本化学連合会長 |
| 委 員 | 有馬 朗人 | 学校法人根津育英会 武蔵学園長 |
| 委 員 | 今榮 東洋子 | 総合科学技術会議議員 |
| 委 員 | 北澤 宏一 | 科学技術振興機構理事長 |
| 委 員 | 郷 通子 | 情報・システム研究機構理事 |
| 委 員 | 小林 喜光 | 株式会社三菱ケミカルホールディングス社長 |
| 委 員 | 近藤 信司 | 国立科学博物館館長 |
| 委 員 | 高橋 恭平 | 昭和電工株式会社社長(石油化学工業協会会长) |
| 委 員 | 竜田 邦明 | 日本化学会副会長 |
| 委 員 | 翼 和行 | IUPAC副会長 |
| 委 員 | 西出 宏之 | 日本化学連合副会長 |
| 委 員 | 藤嶋 昭 | 日本学術会議化学委員会委員長 |
| 委 員 | 藤吉 建二 | 三井化学株式会社会長(日本化学工業協会会长) |
| 委 員 | 毛利 衛 | 日本科学未来館館長 |
| 委 員 | 米倉 弘昌 | 住友化学株式会社会長(日本経済団体連合会会长) |

1.3 世界化学年日本委員会委員長挨拶

(世界化学年日本委員会 2010 年 8 月 6 日付ホームページより転載)

世界化学年日本委員会委員長
理化学研究所 理事長
野依良治

2011 年は世界化学年です。その百年前の 1911 年、キュリー夫人がラジウムとポロニウムを発見した功績でノーベル化学賞を受賞しました。この一世紀の間に、化学においてめざましい発見や発明がなされ、その成果を活かして数々の優れた技術が生まれました。私たちの豊かな物質文明は多くの化学産業技術に支えられていますが、さらに 20 世紀における人類の平均寿命の伸長への貢献は特筆に値します。

しかし、現在我々は人口爆発に端を発し、資源の枯渇、気候変動、環境劣化、貧困をはじめとするさまざまな地球規模の問題に直面しています。科学が人類の生存に果たすべき役割は何か。真理を追究する本質は不变ですが、科学と社会のかかわりは時代の宿命です。化学界、産業界も社会の求めに応じて、今一度あり方を見つめ直す必要があります。

“Chemistry – our life, our future” 化学は新たな価値を創り、未来社会を支えます。今世紀にいかなる国も決して一国では生き続けることはできません。卓越した科学技術は国際競争と国際協調の柱です。世界化学年を通じて、多くの若者たちが手を携え、豊かで輝ける未来社会が拓けることを祈念します。



世界化学年日本委員会委員長 野依良治
(理化学研究所理事長、2001 年ノーベル化学賞受賞者)



International Year of
CHEMISTRY
2011



International Union of
Pure and Applied
Chemistry



United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization

世界化学年 カウントダウン 記念シンポジウム

- ◆ 化学に対する社会の理解増進
- ◆ 創造的未来への
化学者の熱意ある貢献への支援

- ◆ 若い世代の化学への興味の喚起
- ◆ 女性の化学における活躍の場の支援

2011年は「世界化学年」

世界化学年

<http://www.chemistry2011.org/>

統一テーマ

“Chemistry—our life, our future”

化学が果たしてきた実績を社会に示し、

21世紀においてサステイナブルな未来社会を実現するために、

化学が果たす役割を明確にする。

日時

2010年12月1日(水)
13:00～

会場

東京大学 小柴ホール

<http://www.iyc2011.jp/>

■主催 日本化学連合 ■共催 世界化学年日本委員会

■後援 内閣府*、文部科学省、
経済産業省、化学オリンピック日本委員会など

申し込み <http://www.iyc2011.jp/sympo-j.html> 期限:11月26日(金) 参加費 一般:12,000円(資料代を含む) 学生:2,000円



プログラム

* 依頼中

第一部 「世界化学年」記念式典

13:00 - 13:40

- 13:00 - 13:10 挨拶 日本化学連合 会長 世界化学年日本委員会 副委員長 御園生 誠
13:10 - 13:30 来賓挨拶 内閣府政策統括官 泉 紳一郎
文部科学省科学技術政策・学術政策局長 合田 隆史*
経済産業省 製造産業局長 鈴木 正徳*
日本化学工業協会会长 藤吉 建二
13:30 - 13:40 世界化学年 行事の紹介 世界化学年日本委員会実行委員長 西出 宏之

第二部 記念シンポジウム 主題「百年を見据える最先端研究開発」

14:00 - 17:50

- 14:00 - 14:15 基調講演「科学技術における化学」 日本科学未来館館長 毛利 衛
テーマ: 未来を拓く最先端研究
14:15 - 14:45 「化学が先導する診断・治療イノベーション」 東京大学 教授 片岡 一則
14:45 - 15:15 「次世代のコミュニケーション社会を拓くプラスティック光ファイバー」 廣應大学 教授 小池 康博
15:15 - 15:30 (休憩)
15:30 - 16:00 「低炭素社会に資する有機系太陽電池の開発最前線」 東京大学 教授 濑川 浩司
16:00 - 16:30 「地球にやさしい環境材料開発」 東京大学 教授 水野 哲孝
テーマ: 未来社会を支える我が社の科学技術
16:30 - 16:50 「これまでもこれからも個性派化学 “昭和電工”」 昭和電工(株) 研究開発センター長 中條 哲夫
16:50 - 17:10 「明日を切り拓く住友化学のクリエイティブハイブリッドケミストリー」 住友化学(株) 執行役員 小川 育三
17:10 - 17:30 「資源・エネルギー・環境分野での触媒技術の貢献」 三井化学(株) 取締役研究本部長 藤田 照典
17:30 - 17:50 「KAITEKI社会に向けて」 (株)三菱ケミカルホールディングス 常務執行役員 池浦 富久

第三部 国際化学オリンピック日本大会報告

17:50 - 18:10

- 17:50 - 18:05 化学オリンピックにみる高校化学の国際化

化学オリンピック日本委員会 実行委員長 渡辺 正

- 18:05 - 18:10 世界化学年大使任命式

第四部 懇談会

18:10 ~

賛同27学協会

安全工学会 (財)化学技術戦略推進機構 (社)化学工学会 (社)化学情報協会 クロマトグラフィー科学会 光化学協会
(社)高分子学会 錯体化学会 (社)色材協会 触媒学会 (社)石油学会 (財)石油産業活性化センター (社)繊維学会
(社)電気化学会 (社)日本エネルギー学会 (社)日本化学会 (社)日本化学工業協会 (一般社団法人)日本化学連合
(社)日本ゴム協会 (社)日本セラミックス協会 日本地球化学会 (社)日本表面科学会 (社)日本分析化学会 (社)日本葉学会
(社)日本油化学会 (社)表面技術協会 (社)有機合成化学協会

後援団体

内閣府* 文部科学省 経済産業省 (独)科学技術振興機構 全国都道府県教育委員会連合会* 日本学術会議*
(独)日本学術振興会 朝日新聞社 科学新聞社 化学工業日報社 産経新聞社 日本経済新聞社 毎日新聞社
読売新聞社 化学オリンピック日本委員会

問い合わせ先

一般社団法人 日本化学連合
「社会のための化学」を目指して。

E-mail : event@jucst.org



2. 世界化学年カウントダウン記念シンポジウム

主催:一般社団法人 日本化学連合

共催:世界化学年日本委員会

協賛:(独) 理化学研究所

後援:内閣府(科学技術政策・イノベーション担当) 文部科学省 経済産業省 日本学術会議

(独)科学技術振興機構 全国都道府県教育委員会連合会 (独)日本学術振興会 朝日新聞社

科学新聞社 化学工業日報社 産経新聞社 日本経済新聞社 毎日新聞社 読売新聞社

化学オリンピック日本委員会

「世界化学年カウントダウン記念シンポジウム」に際しては上記団体に共催、協賛、後援のご支援を仰ぎ、特に (独) 理化学研究所 (独)科学技術振興機構 化学オリンピック日本委員会 には企画の段階から特段のご援助を賜ったことを心より御礼申し上げます。

2.1 事業実施概要

日本化学連合は「世界化学年カウントダウン記念シンポジウム」を主催し、2011 年に「世界化学年」が始まることを社会にアピールしました。シンポジウムでは斯界を代表する方々のご挨拶をいただき、またアカデミアからは「百年を見据える最先端研究開発」、産業界からは「未来社会を支える我が社の科学技術」のご講演をいただき、「世界化学年」を通して、化学の一層の振興と社会への幅広い普及・啓発を図っていくことを参加者全員が認識を共有することを目指しました。

世界化学年日本委員会との共催、理化学研究所の協賛を、また多くの団体から後援名義を使用させていただき、2010 年 12 月 1 日(水)午後、東京大学・小柴ホール(東京都文京区本郷 7-3-1)において開催しました。

第一部の記念式典では、御園生誠会長の挨拶に続き、内閣府・泉紳一郎政策統括官、文部科学省・合田隆史局長、経済産業省・川上景一審議官、日本化学工業協会・藤吉建二会長からご来賓挨拶をいただきました。西出宏之世界化学年日本委員会実行委員長の「日本における世界化学年行事の紹介」に続いて、2010 年度ノーベル化学賞受賞者の鈴木章先生からのビデオメッセージを上映しました。

第二部の記念シンポジウム「百年を見据える最先端研究開発」では、毛利衛先生の基調講演の後、突然会場にお見えになった 2010 年度ノーベル化学賞受賞者の根岸英一先生からメッセージをいただきました。シンポジウムに戻り、「未来を拓く最先端研究」のテーマで片岡一則(東大)、小池康博(慶大)、瀬川浩司(東大)、水野哲孝(東大)の 4 先生から、また「未来社会を支える我が社の科学技術」のテーマで中條哲夫(昭和電工)、小川育三(住友化学)、藤田 照典(三井化学)、池浦富久(三菱ケミカルホールディングス)の各社役員から講演をいただきました

第三部の国際化学オリンピック日本大会報告では渡辺正先生(東大)の講演と世界化学年大使 6 名の任命式(1 名欠席)を行いました。

会場は 230 名余りの参加者があり、また次世代を担う若い人たちが多く見られ、熱気にあふれ盛会でした。世界化学年をこれから迎えるのにふさわしいシンポジウムとなりました。また、参加者には講演要旨集の冊子、講演資料集の CD 及び世界化学年のピンバッジを配布しました。

2.2 世界化学年カウントダウン記念シンポジウム プログラム (所属名と役職名は 2010 年 12 月時点)

第一部 記念式典(13:00～13:45)

司会 長谷川 美貴(青山学院大学)

| | | |
|------------|--|----------------------------------|
| 挨拶 | 日本化学連合会長、世界化学年日本委員会副委員長 | 御園生 誠 |
| 来賓挨拶 | 内閣府政策統括官 文部科学省科学技術政策・学術政策局長 経済産業省 製造産業局長 日本化学工業協会会长 | 泉 紳一郎 合田 隆史 鈴木 正徳 藤吉 建二 |
| 世界化学年行事の紹介 | 世界化学年日本委員会実行委員長 | 西出 宏之 |
| ビデオメッセージ | 2010 年ノーベル化学賞受賞者 | 鈴木 章 |

第二部 記念シンポジウム 「百年を見据える最先端研究開発」(14:00～18:00)

司会 山元 公寿(東京工業大学)

| | | |
|--|-------------------------|-------|
| 基調講演「科学技術における化学」 | 日本科学未来館館長 | 毛利 衛 |
| 挨拶 | 2010 年ノーベル化学賞受賞者 | 根岸 英一 |
| (テーマ: 未来を拓く最先端研究) | | |
| 講演 1「化学が先導する診断・治療イバーション ~超分子ナノテクノロジーによる薬物・遺伝子のピンポン・ト・テリバリー~」 | 東京大学教授 片岡 一則 | |
| 講演 2「次世代のコミュニケーション社会を拓くプラスティック光ファイバー」 | 慶應大学教授 小池 康博 | |
| 講演 3「低炭素社会に資する有機系太陽電池の開発最前線」 | 東京大学教授 濑川 浩司 | |
| 講演 4「地球にやさしい環境材料開発」 | 東京大学教授 水野 哲孝 | |
| (テーマ: 未来社会を支える我が社の科学技術) | | |
| 講演 5「これまでこれからも個性派化学 “昭和电工”」 | 昭和电工(株) 中條 哲夫 | |
| 講演 6「明日を切り拓く住友化学のクリエイティブハイブリットケミストリー」 | 住友化学(株) 小川 育三 | |
| 講演 7「資源・エネルギー・環境分野での触媒技術の貢献」 | 三井化学(株) 藤田 照典 | |
| 講演 8「KAITEKI 社会に向けて」 | (株)三菱ケミカルホールディングス 池浦 富久 | |

第三部 国際化学オリンピック日本大会報告(18:05～18:25)

司会 西原 寛(東京大学)

| | |
|--------------------------|---------------------------|
| 講演9「化学オリンピックにみる高校化学の国際化」 | 化学オリンピック日本委員会実行委員長 渡辺 正 |
| 世界化学年大使任命式 | |
| 閉会の挨拶 | シンポジウム実行委員長 山元 公寿(東京工業大学) |
| 懇談会(18:30～19:00) | 講師とシンポジウム参加者との懇談 |

2.3 シンポジウム会場の様子



小柴ホール入り口



御園生誠世界化学年日本委員会副委員長挨拶



鈴木章先生 ビデオメッセージ



会場風景



毛利衛先生 基調講演



根岸英一先生 挨拶



渡辺正先生 講演



世界化学年大使 任命

2.4 シンポジウム企画委員

本カウントダウン記念シンポジウムは日本化学連合・理事会・企画委員会によって企画立案実施されたものです。

平成 22 年度 企画委員会 委員

(所属名と役職名は 2010 年 8 月時点)

| | | |
|-----|-------|-------------|
| 委員長 | 西原 寛 | 理事 東京大学 |
| 委 員 | 新井 達郎 | 理事 筑波大学 |
| 委 員 | 井上 晴夫 | 理事 首都大学東京 |
| 委 員 | 上村 大輔 | 理事 慶應義塾大学 |
| 委 員 | 小松 隆之 | 理事 東京工業大学 |
| 委 員 | 大野 弘幸 | 理事 東京農工大学 |
| 委 員 | 中村 洋 | 理事 東京理科大学 |
| 委 員 | 中田 三郎 | 理事 日本化学工業協会 |
| 委 員 | 山元 公寿 | 東京工業大学 |

世界化学年記念



キュリー夫人

2011
C
CHEMISTRY
International Year of
CHEMISTRY
2011

科学伝記読書感想文



2011年は「世界化学年」です。化学をよりよく理解し興味をもってもらうために、日本でも世界化学年日本委員会*のもとで、さまざまな活動が計画されています。その一つとして、小・中学生の皆さんに、科学者キュリー夫人を通して化学をより身近に感じてもらうことを目的として、「キュリー夫人科学伝記読書感想文コンクール」を企画しました。なお、2011年はキュリー夫人のノーベル化学賞受賞から100年目にあたります。みなさんのご応募をお待ちしています。

応募要項の詳細:<http://www.iyc2011.jp/curie-j.html>

*委員長:野依良治(2001年ノーベル化学賞受賞者)

応募者の資格および部門

応募者は日本の小中学校に在籍する児童・生徒に限ります。2011年3月1日現在の在籍状況により2部門に分けて募集します。

- ・小学生部門(4~6年生)
- ・中学生部門(1~3年生)

図 書

下記の図書を参考にして、自分で選んでください。

「キュリー夫人」伊東信著(ポプラ社)

「キュリー夫人」ドーリー著

・中村妙子訳(ポプラ社) ・榎原晃三訳(偕成社) ・桶谷重雄訳(講談社)

・中山知子訳(講談社) ・光吉夏弥訳(岩波書店)

「キュリー夫人」エーヴ・キュリー著

・河野万里子訳(白水社) ・川口篤ほか訳(白水社) など

主催:一般社団法人日本化学連合 共催:世界化学年日本委員会

共催:化学工業日報社 協賛:(独)科学技術振興機構

後援:内閣府* 文部科学省 日本学術会議* 全国都道府県教育委員会連合会

全国学校図書館協議会 全国中学校理科教育研究会 日本私学教育研究所 全国小学校理科教育研究会

日本私立小学校連合会 朝日新聞社 科学新聞社 産経新聞社 毎日新聞社 読売新聞社 (*依頼中)

2011年は化学の年

書き方

- ① 400字詰め原稿用紙(縦書き)に自筆して下さい。(コピー・ワープロは不可)
- ② 文字数 小学生部門:1200字以内 中学生部門:2000字以内
- ③ 句読点はそれぞれ1字に数えます。改行のための空白箇所も字数に数えます。
- ④ 1行目に題名、2行目に学校名、氏名を書いて下さい。これらも上記字数に含めます。

募集期間

2010年12月1日（水）～2011年4月10日（日）（当日消印有効）
冬休みと春休みを利用して書いて下さい。

応募作品

- ① 応募は日本語で書かれた作品に限ります。
- ② 応募は個人のオリジナルで未発表の作品に限ります。他の類似コンクールとの二重応募は認めません。
- ③ 作品は理由を問わず返却しません。
- ④ 入賞作品の著作権、出版権は主催者に帰属します。

作品の提出

- ① 児童・生徒から直接下記提出先に郵送で提出してください。(在籍校を通じての提出は必要ありません。)
提出先: 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-5 化学会館3F
日本化学連合事務局 読書感想文コンクール係
- ② 別掲の応募票(コピー可)に必要事項を明記し、作品の上に貼付けして右肩をとじてください。

審査

審査は、学校関係者および学識経験者などで構成される委員会で行います。

入賞発表

以下の賞を選考し、受賞者本人あてに通知し、同時に一般社団法人化学連合と世界化学年日本委員会のホームページにも掲載します。「化学工業日報」「その他新聞」紙上に掲載されることがあります。

最優秀賞(小学生・中学生 各1名) 優秀賞(小学生・中学生 各若干名)

審査員特別賞(小学生・中学生 各若干名)

表彰

受賞者に表彰式で、賞状および副賞を贈呈します。

個人情報の取り扱い

応募に当たって記載された情報は、上記結果の公表や通知などに限って使用させて頂きます。

<http://www.jucst.org/> TEL 03-3292-6010 FAX 03-3292-6319

一般社団法人日本化学連合事務局

〒101-0062 千代田区神田駿河台1-5 化学会館3F 読書感想文コンクール係 mail : event@jucst.org

3. キュリー夫人科学伝記読書感想文コンクール

主催：一般社団法人 日本化学連合

共催：世界化学年日本委員会 化学工業日報社

協賛：(独)科学技術振興機構

後援：内閣府 文部科学省 日本学術会議 駐日ポーランド共和国大使館

全国都道府県教育委員会連合会 全国学校図書館協議会 全国中学校理科教育研究会

日本私学教育研究所 全国小学校理科教育研究会 日本私立小学校連合会

朝日新聞社 科学新聞社 産経新聞社 毎日新聞社 読売新聞社

「キュリー夫人科学伝記読書感想文コンクール」に際しては上記団体に共催、協賛、後援のご支援を仰ぎ、特に 駐日ポーランド共和国大使館 (独)科学技術振興機構 世界化学年日本委員会 化学工業日報社には企画の段階から特段のご援助を賜ったことを心より御礼申し上げます。

日本化学連合では世界化学年記念事業の一つとして、キュリー夫人科学伝記読書感想文コンクールを企画いたしました。この企画は、化学年の目的として掲げられた、①化学に対する社会の正しい評価と理解の増進と、②若い世代の化学への興味の喚起、に沿う形の企画であります。丁度、感想文募集の最中に3.11東日本大震災が起き、充分な応募が得られないのではと懸念されましたので、募集期間を約二週間延長することに致しました。幸い、小学生の部と中学生の部あわせて多数の応募があり、また、感想文の中には福島原子力発電所の事故と放射線との関連にタイムリーに言及する作品も散見されました。残念ながら、震災の被害の大きかった福島、宮城、岩手三県からの応募は2件だけで非常に少なく、同情を禁じえませんでした。日本中がこのような困難な時期にも拘わらず、質の高い感想文が多く寄せられ、主催者一同、子供たちの、感性と熱意に啓発されました。

3.1 事業実施概要

世界化学年記念「キュリー夫人科学伝記読書感想文コンクール」の企画は2010年10月5日開催の日本化学連合・臨時理事会において承認され、実施、運営のために以下のワーキンググループ委員が選任され、活動を開始しました。

ワーキンググループ委員

委員長 小松 隆之(東京工業大学理工学研究科教授)

委 員 吉祥 瑞枝(東邦大学理学研究科非常勤講師)

委 員 齊藤 幸一(開成学園理事)

委 員 里川 重夫(成蹊大学理工学部教授)

委 員 下井 守(東京大学教養学部特任教授)

委 員 高橋美由紀(文京区立第九中学校教諭)

委 員 牧野 順子(品川区立小中一貫校八潮学園副校長)

委 員 松島 浩子(都立光明特別支援学校)

委 員 安永 俊一(化学工業日報社 出版局長)

本感想文コンクールは小学生(4~6年生)と中学生を対象に、2010年12月1日から2011年4月18日の間を募集期間として募集しました。国内で出版されている多くの伝記を読んで、読後感想文が全国から470編(小学生の部:92編、中学生の部:378編)も寄せられました。小学生の部と中学生の部に分けて、それぞれ第一次審査と第二次審査を経て合計40名の入選者が選ばれ、入選者の中から最終選考委員会において最優秀賞、優秀賞、および審査員特別賞が選ばれました。第一次、第二次および最終選考に当たられた委員の方々は以下の通りです。

感想文コンクール第一次選考委員

| | |
|-----|---------------------------|
| 委員長 | 小松 隆之(東京工業大学大学院理工学研究科教授) |
| 委 員 | 牧野 順子(品川区立小中一貫校八潮学園教諭) |
| 委 員 | 伊藤 隆子(足立区立淵江中学校教諭) |
| 委 員 | 西田 孝子(江戸川区立葛西中学校教諭) |
| 委 員 | 武智 寛子(横浜国際女子学院翠陵中学高等学校教諭) |
| 委 員 | 大川 満里子(ルーテル学院教諭) |
| 委 員 | 高橋 美由紀(文京区立第九中学校教諭) |
| 委 員 | 里川 重夫(成蹊大学理工学部教授) |
| 委 員 | 柄山 紀子(江戸川区立小岩第二中学校教諭) |
| 委 員 | 篠崎 優也(江戸川区立小岩第二中学校教諭) |
| 委 員 | 木村 由美子(川崎市立今中中学校教諭) |
| 委 員 | 渡部 孝子(江東区立第二砂町中学校教諭) |
| 委 員 | 武田 千鶴(東久留米市立久留米第三小学校教諭) |
| 委 員 | 有井 新之助(新宿区立市谷小学校教諭) |
| 委 員 | 白川 陽子(元都内高等学校教諭) |
| 委 員 | 田村 定義(慶應義塾女子高等学校教諭) |
| 委 員 | 高野 博維(私立淑徳巣鴨中学校教諭) |
| 委 員 | 跡部 みなき(公益社団法人電気化学会) |
| 委 員 | 坂口美佳子(科学読物研究会) |
| 委 員 | 松村 順子(朝日小学生新聞) |

感想文コンクール第二次選考委員

| | |
|-----|--------------------------|
| 委員長 | 小松 隆之(東京工業大学大学院理工学研究科教授) |
| 委 員 | 牧野 順子(品川区立小中一貫校八潮学園教諭) |
| 委 員 | 下井 守(東京大学教養学部特任教授) |
| 委 員 | 吉祥 瑞枝(東邦大学理学研究科非常勤講師) |
| 委 員 | 里川 重夫(成蹊大学理工学部教授) |
| 委 員 | 跡部 みなき(公益社団法人電気化学会) |
| 委 員 | 高橋 映子(知性社編集部) |
| 委 員 | 高橋 美由紀(文京区立第九中学校教諭) |
| 委 員 | 松島 浩子(都立光明特別支援学校教諭) |
| 委 員 | 鈴木 誠一(成蹊大学理工学部) |

感想文コンクール最終選考委員

| | |
|-----|---------------------------------|
| 委員長 | 蟻川 芳子(日本女子大学学長) |
| 委 員 | 小川真理子(東京工芸大学芸術学部教授) |
| 委 員 | 織田島 修(化学工業日報社 代表取締役社長) |
| 委 員 | 川上 伸昭(科学技術振興機構理事) |
| 委 員 | 吉祥 瑞枝(東邦大学理学研究科非常勤講師) |
| 委 員 | 栗原 峰夫(横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校副校長) |
| 委 員 | 小松 隆之(東京工業大学大学院理工学研究科教授) |
| 委 員 | 齊藤 幸一(開成学園理事) |
| 委 員 | 下井 守(東京大学教養学部特任教授) |

最終選考で選ばれた、最優秀賞は小学生部門、中学生部門各 1 名で、優秀賞は小学生部門 2 名、中学生部門 3 名が選ばれました。入選作はどれも高い水準で、大変厳しい選考となりました。それを補完する意味で、今回は審査員特別賞を設け、小学生部門 3 名と中学生部門 6 名を更に表彰することに致しました。次表に入選作を含めて、各賞受賞者のリストを次頁に掲載いたします。

キュリー夫人科学伝記読書感想文コンクール入賞者

(2011年8月3日発表)

| 賞 | 部門 | 受賞者 | 学校名 |
|--------|-----|---|---|
| 最優秀賞 | 小学生 | 側島 レン | 海津市立海西小学校 |
| | 中学生 | 金生 立樹 | 山形市立蔵王第一中学校 |
| 優秀賞 | 小学生 | 高城 美帆 浅田 恵果 | 横浜雙葉小学校 淑徳小学校 |
| | 中学生 | 高 裕美子 天野 双葉 野師本 桃子 | 不二聖心女子学院中学校 ミラノ日本人学校中学部 小矢部市立石動中学校 |
| 審査員特別賞 | 小学生 | 米川 かなで 廣瀬 久美 広澤 海佑 | 鈴鹿市立稻生小学校 甲州市立塩山南小学校 北斗市立上磯小学校 |
| | 中学生 | 高橋 来夢 占部 勝也 浅利 和幸 富永 かおり 福山 翠 望月 祐希 | 品川区立八潮学園中学校 狹山市立柏原中学校 青森市立浅虫中学校 足立区立第五中学校 千葉市立蘇我中学校 春日部市立武里中学校 |
| 入選 | 小学生 | 沢田 美音 井上 美羽 藤原 弘樹 山本 凜衣子 浦野 玲子 堤 千佳 吉川 翔太郎 川中子 路人 林 佳慧 | 福岡雙葉小学校 品川区立八潮学園小学校 葉山町立上山口小学校 西宮市立段上小学校 日本女子大学附属豊明小学校 国立筑波大学附属小学校 安城市立二本木小学校 府中市立住吉小学校 品川区立八潮学園小学校 |
| | 中学生 | 菅野 舜也 菊池 樹 大山 菜津乃 田口 琴音 森田 礼香 大貫 真澄 澤村 玲星 田中 仁 春日 大輔 増田 桃子 杉田 ひかり 奈良 瞭我 蘇武 鈴奈 石澤 瑞穂 佐々木 沙慧子 | 足立区立第五中学校 品川区立八潮学園中学校 淑徳巣鴨中学校 淑徳巣鴨中学校 淑徳巣鴨中学校 淑徳巣鴨中学校 淑徳巣鴨中学校 淑徳巣鴨中学校 淑徳巣鴨中学校 文京区立第九中学校 文京区立第九中学校 文京区立第九中学校 山形市立第七中学校 山形市立第七中学校 山形市立第七中学校 |

3.2 最優秀賞と優秀賞の感想文の紹介

入選した感想文の中から最優秀賞 2 編(小学生部門:側島レン、中学生部門:金生立樹)と優秀賞 5 編(小学生:高城美帆呂、浅田恵果、中学生部門:高裕美子、天野双葉、野師本桃子)の全文を掲載します。

最優秀賞 小学生部門

偉大な科学者、キュリー夫人が残したもの

側島 レン (海津市立海西小学校)

僕はこの本を読んで、偉大な科学者の人生を知り心から尊敬しました。キュリー夫人は、多くの困難と闘い、不屈の精神でラジウムを発見しました。まさに科学に身をささげた人生だったと思います。数々の賞を受賞しても決して名誉におぼれなかったことから、彼女の功績が名声のためではなく、純粋に、人類を救うためのものだったということが分かります。また、すさまじいまでの忍耐力も立派です。ラジウムのために指先をひどく損傷しても挫折しなかったことや、女性であるがゆえに様々な偏見に囲まれても、夢をあきらめなかつたところが本当に強いと感じました。生計を立てるために教師の仕事をし、家事や子育てをしながら研究を続けるなんて、僕は考えただけで気が遠くなってしまいます。どうしてこんな過酷なことができたのでしょうか。僕が思うに、キュリー夫人は自然や人を愛する心が強かつたし、家族や友人の愛情に支えられていたから、自分の才能を信じて研究し、目標を達成できたのではないかでしょうか。

放射性物質に関する研究は、人類にとって偉大な成功となりました。特にガンを治療する医療は、画期的で驚きました。人の寿命が延びて素晴らしいと思います。実は、僕が放射線に興味を持ったのは、お母さんが放射線治療経験者だったからです。

お母さんは僕を妊娠している時に子宮ガンという病気になりました。だからお母さんはガンが進行するのを覚悟して、僕を出産するために、ガンの手術や治療を遅らせました。そして出産後、子宮を摘出し放射線治療を受けました。放射線はガン細胞を破壊するけれど安全だと聞かされていたからです。確かにお母さんの命は助かりました。しかし放射線治療の後は何ヶ月もひどい下痢が続き、足はリンパ浮腫という病気になりました。

お母さんは現在でも腹痛が毎日あり、一生薬を飲んで生活しなければなりません。将来のことを考えると、出産という目的を達成するための犠牲は大きかったと思います。壮絶な闘病生活の話を聞いて、僕は胸が張り裂けそうになりました。それから自分がこんなにも愛されていることを知って、感謝の気持ちで涙が止まりませんでした。

僕は今までの人生で、苦しくても希望を持って生きることが大事だということを学びました。その一方で、僕はさらなる放射線治療の発達や、もっと体に負担が少ない化学療法が確立されることを心から望んでいます。

最近では、放射能は医学の検診や病気の治療だけでなく、植物の品種改良や、飛行機のエンジンの整備などにも使われています。原子力の平和利用など、現代の科学技術の発展は、めざましいものがあります。これからも、化学は新たな価値を造り、未来社会を支えていくと、僕は信じています。

最優秀賞 中学生部門

研究の意味

金生 立樹（山形市立藏王第一中学校）

「大切なのは、研究の対象である自然界に存在するものや現象に好奇心をたやさないことであり、研究をする人間のほうは重要ではない。」

そう、マリー・キュリーはよく語っていたそうです。彼女のその言葉から、世界中の人们に大きな影響をあたえ現在の社会に貢献している研究の裏には、自分の好きな事にとことん追求する姿勢、周りの見方や意見に流されない強さを感じました。先行きが見えず重苦しい社会の雰囲気、器具も資金もとぼしい中での研究、外国人の女性としての偏見……。さまざまな障壁が立ちふさがる中でも、彼女がどうしてもあきらめなかつたのは、自分が納得のいくまで『知りたい』という強い好奇心、ただそれだけでした。そして研究の成果を自分だけのものにせず、皆と共有したいとも願っていました。彼女の願いが形となり、こうして今、伝記として多くの人が手にすることができます。

「放射能」という言葉は彼女が考えついたものだそうですが、ぼくはこの言葉を東日本大震災というでき事を通して、よく耳にするようになりました。原子力発電の問題が生じた事により、多くの人は放射能の被害をおそれています。発電所付近の農家や酪農家の方は、放射能の影響により、家族との生活を支えてきたであろう大切な仕事を失いました。また多くの人は仕事を失っただけでなく、避難所生活を余儀なくされ、住み慣れたその土地を離れなければならないというさみしさを感じているのです。このような点だけ考えてみると、放射能は危険な物であるとか、有害な物であるという印象だけが、私達に残ってしまうかもしれません。しかし視点を変えてみると、この発電所があるおかげで、電気が私達の生活に重要な役割を果たしてきたことは見落とす事のできない事実です。その電気のおかげで、二十四時間営業できる店がたくさんあり、私達の活動できる時間をより長く快適にしてくれています。また、放射線は多くの人の命を救ってきたということもあります。その一例が、X線です。病気の早期発見、早期治療に貢献してきました。

マリー・キュリーは自分の研究が、世界の放射線医療の発展につながると考え、ラジウムの精製技術の特許を取ること無く多くの人に技術を公開したそうです。ある人が

「特許を取っておけば、莫大な報酬が得られたはずなのに。」

と言った事があるそうです。そのときの彼女の答えに考えさせられました。

「人生最大の報酬は、知的活動によってえられる。」

直接、彼女に聞いたわけではないので、確かなことはわかりませんが、彼女が求めた報酬というのは、富や名声ではなく、自分の研究が一人でも多くの人に役に立つということではなかったのだろうかと思いました。ぼくはその報酬は、本当に貴重で価値のある物だと思いました。

ぼくは彼のような大きな研究をしているわけではありませんが、科学部に所属する一人として、その研究に対する姿勢や考え方には尊敬し、見習いたい点があります。一つは、自分の意志を貫き通して、知りたい事をとことん追求していくことです。もう一つは、彼女のように、研究を通して他の人の役に立つ事で喜びを感じられるようにしていきたい、ということです。

今、ぼくは科学部で学校周辺の環境について調査研究を行なっています。ぼくの学校の周りでは、田んぼや畑が多くニホンザリガニなどの多くの生物が生息している自然豊かな所です。しかし実際に研究を進めていくうちに、想像以上に川の水や大気が汚れている事がわかつてきました。僕は、その結果や現状が

わかった事だけに満足するのではなく、なぜこうなるのか、それを改善するためにどうしたらよいかということなどを考え、自分が納得するまで追及していきたいと思うようになりました。そして自分から、身の回りの自然に積極的にはたらきかけることで、ほんのわずかであっても他のだれかのために役に立ちたいと思います。これから研究を進めていく上で、うまくいかない事や難しい事に直面したとしてもあきらめたり妥協したりすることなく、自分の思い描く最終目標に向ってがんばっていきたいと思います。それは、人の役に立つ研究をすることです。

優秀賞 小学生部門

私の心の支え「化学」

高城 美帆(横浜雙葉小学校)

私とキュリー夫人の出会いは三年前の小学校二年生の時でした。学校の図書館で何気なく手に取ったその本が後に私の将来の目標になるとは夢にも思いませんでした。

本を読み終えて多くの事を学び、多くの衝撃を受けたことを今でも覚えています。そして、キュリー夫人についてもっと知りたくなりました。化学についてや生まれた国の事などを調べました。そして、一番興味を持ったことが「元素」についてです。「元素」、まだ小学二年の私には耳なれない言葉でした。しかし「元素」について参考書を読むにつれてますます興味を持ちました。キュリー夫人が発見したポロニウムとラジウムについて調べてみました。すると、どの本にも放射性の元素と書いてありました。それを知り、キュリー夫人は自分の身さえもかえりみず世界のために貢献したのだと思いました。いくつもの困難にも負けず自分の意志を貫き研究を続けたキュリー夫人。それだけ科学に対する情熱が強かったのだと思います。それゆえ、失敗の連続でもあきらめず最後まで努力できたのだと思います。この時から私はキュリー夫人のような学者になって世界のために働きたいと思うようになりました。

先日の東日本大震災のとき、私は家に一人でいました。父や母、祖父母などと連絡がとれず、停電にまでなってしまったため、ろうそくの火だけが頼りでとても心細かったです。そのときふと、どんな困難にも負けないキュリー夫人の事が頭をよぎりました。彼女ならどうしただろうかと考えました。きっと好きな研究をしていましたと思います。それゆえ私も好きな『周期表』という本を読んでいました。母と会えるまでの時間は停電になってから五時間くらいでした。しかし、好きなことをしていたのであつという間にかんじられました。また、私にとって「化学」は心の支えだと感じました。

今回の地震で犠牲になった方々が大勢います。それは、地震が自然災害なので、いつ、どこで、どのくらいの強さでおこるか分からぬからだと思います。

私は将来、自然災害のようなまだ誰も分かっていないことを解明して、世界の人たちを救いたいと思っています。そのためには、これからも日々の努力をおこたらず、どんな困難が待ちかまえていようと夢へ向かって歩き続けていきたいです。

そして、私の生き方を導いて下さったキュリー夫人に心から感謝しています。

優秀賞 小学生部門

キュリー夫人の科学の精神

浅田 恵果(淑徳小学校)

私が初めてキュリー夫人を知ったのは、六歳の時に読んだ伝記の本だった。すごい科学者で、しかも女性ということにとても感動し、彼女のことが大好きになった。美容室に行っても「キュリー夫人の髪型にして下さい」と頼んでお店の人を困らせた。

それから、キュリー夫人についての様々な本を読み、ますます彼女自身と科学について興味を深めていった。私の夢は、将来科学者になって人類に役立つ研究をすることだ。これには弟も賛成してくれて、「一緒に共同研究しようね。」とよく話している。

キュリー夫人の成功は、“たゆまぬ努力”と科学を愛する“科学の精神”によるものだと思う。彼女が物理学に出会ったのは、お姉さんを助ける為に家庭教師をしていた時だ。そして物理学の面白さ楽しさを知ってからは、どんなに苦しい時でもあきらめずに勉強を続けたのがすごいと思う。パリでの厳しい生活の中で栄養失調になるほど食事を儉約し、あるだけの服を着こみイスをかついで寒さをしのいで勉強した話に、私は深く感動した。そのたゆまぬ努力は結婚後も夫ピエールと続けられ、特にピッヂブレンドという鉱石から三年以上かけてやっと 0.1 グラムの取り出した努力に私は胸をうたれた。

キュリー夫人の“科学の精神”とはいいったい何か？私は「自分の為でなくみんなの為そして人類のために科学を研究する」精神だと信じている。初めてノーベル賞を受賞した時も賞金六万フランを寄付し、またもらったラジウムも「もし自分だけの為に使ったら“科学の精神”に反するから」と研究所へおくよう願った。「学者だから」とラジウムの特許料を求めるのもこの精神の現れである。

私はこの精神には深い愛もこめられていると思う。キュリー夫人は戦争の時に負傷者を助ける為にレントゲンを乗せた車で、自ら戦場に向かった。さらに驚くべきことは、ずっと愛してきた夫のピエールが亡くなった時に悲しみの底にありながら、「それでも科学を続けなければいけない」と研究を続けた事だ。高い“科学の精神”をもったキュリー夫人を私は女性としてとても誇りに思う。

キュリー夫人の亡き後の原子力の研究は、人類に大きくこうけんした一方で、原子力爆弾など戦争に使われる悲げきも生まれてしまった。キュリー夫人は今天国でこれをどう見てるだろうか？今年三月日本は、東日本大震災でじん大な被害を受け、原子力発電所は今なお大きな問題をかかえている。

私は、今こそキュリー夫人の“科学の精神”を受け継がなければならないと思う。日本と世界は「みんなの為、人類の為に」というキュリー夫人の志を思い出して、その精神で問題に取り組めば解決の道があるはずだ。なぜならキュリー夫人の信念通り「科学は人類を幸せにするためにある」のだから。

優秀賞 中学生部門

想像力

高 裕美子(不二聖心女子学院)

津波十メートル。この波が、家族や家、車をすさまじい勢いでひきこんでいった。町ごと流されていく東日本大震災の悲惨な映像を前に、同じ日本人でありながらも、その映像が実際のものだとは想像しがたく、ただ画面の中の世界だけのように思えてならなかった。現在、日本だけに留まらず世界各国の情報が、家に居ながらにして、テレビやインターネットを通して知ることができる。だが私達は、その情報をはたしてどこまで自分のこととして受け止めていただろうか。「知る」ということをただそこまで終わりにさせていては、い

つまでもその知識は単なる情報にすぎない。キュリー夫人は、知ることを単なる情報で終わらせることはなかった。

キュリー夫人は「私は何が為されたかを調べるのではなく、為すべき何が残っているかが知りたいだけだ。」との名言を残している。第一次世界大戦中、彼女が四十七歳の時のことだ。ある日、医師が銃弾を受けた兵士の治療に困っていることをキュリー夫人は知り、すぐさま行動に移した。母親としての立場や、研究は二の次にして、第二の祖国「フランス」のために尽くそうと決心したのだ。着眼したのは、今まで治療には使われていなかったX線で、銃弾の破片のありかを透視することに使えるのではと考えた。そして、自らトラックに乗り込み、戦地で、病院から病院へとかけまわったのだ。

私はキュリー夫人のこの行動に感銘を受けた。ただ情報として受け止めていただけなら、たくさんの命が助かることとはなかったのだ。そこには「知る」ことに想像力を込めた彼女のぬくもりが感じられた。人間社会において一番怖いことは、この想像力が弱くなることではないだろうか。

現代の社会がここまで進歩したのは、歴代の科学者のたぐいまれな想像力が、さまざまな技術を発見し、実践へと導いてきたためである。キュリー夫人が人生をかけて研究した成果の一つに、ラジウムの発見がある。ウラン化合物が、放射線として、たえずエネルギーを発するという、まだ深く研究がすすめられていない不思議な性質に、いち早く興味をもつた。そして、光線の強度がウランの量に比例することと、外的条件に左右されないという性質を発見した。そこから、この光線は原子の特性をもっているとの仮説をたて、それを証明するため、夫ピエールと協力して数々の実験を行い、新しい元素である、ポロニウムとラジウムを発見したのだ。それが発展して、現在の放射線治療などにつながっている。このように科学は、想像力を源として、仮説⇒実験⇒証明⇒実践というサイクルの繰り返しで、今日まで発展を続けてきたのだ。

身近でおきているけんかも、世界で起きている戦争も、絶え間なく争いを起こさせ、過激にしている原因は何なのだろう。争いごとの発端となる敵意や憎しみは、どこから来るのだろう。お互いに冷静さを失っている時だったので、相手の立場や状況を理解せずに、行動してしまったのではなかつたか。自分の立場だけで考え、相手の状況をおもんばかりすことなく、権利ばかりを主張していれば、関係はよくならない。「自分も傷ついたけれど、もしかしたら相手も自分が原因で傷ついていたのかもしれない」創造力を少しでも働かせ、この気持ちがもてれば、和解へと、一歩近づけると思う。

良い情報も、悪い情報も、ただ「知る」だけでは頭でつかちになるだけだ。「知る」ことに想像力を込めて、はじめて周りの世界がみえ、前進できるのだ。想像力が弱いと、科学の進歩はない。それどころか、人を理解することも、世界中で困っている人達の苦しみや悲しみを共有することも、学習することも、生きる喜びを感じることもできないのだ。理解するということは、すなわち想像するということなのだ。

学校で何気なく国語や日本史を勉強している私と、見つかったら処刑される危険を冒しながら自国ポーランドの言葉や歴史を勉強していたキュリー夫人。十九世紀後半のポーランドと現在の日本とを比べると、情報量は格段に増え、しかも簡単に得られるようになってきている。しかし、それがかえって私達の知ることに対する、どん欲な姿勢を衰えさせている気がする。親や先生から言われて、仕方なく勉強をやらされているというのなら変な話だ。勉強の目的は、昔から変わっていない。将来の自分や社会の役に立つよう知識を蓄え、想像力を養うためなのだ。歴代の科学者達のおかげでもたらされたこの技術進歩の流れを止めることなく、引き続き私達も様々な想像力を加えて、さらなる発展に貢献できるよう、勉強、実践していきたい。人を思いやれない、想像力のない社会なんてさぞかし住みにくいくことだろう。

優秀賞 中学生部門

キュリー夫人の願い

天野 双葉(ミラノ日本人学校中学部)

三月十一日から、日本はまったく変わってしまった。東日本大震災、津波の被害、福島原子力発電所の事故。日本がこのように壊滅的な状態になったことは、戦争以外で未だかつてなかったことだろう。地震の余震におびえながら、放射能の目に見えない脅威にさらされている日本人たちはどれほど不安な毎日を送っているのだろうか。私の住むイタリアでも、ニュース映像は毎日のように報道されている。

あんなに安全だと言われていた日本の原発が自然の力にあっけなく、屈せざるを得なかつた正に、その証明のような今回の事故。日本は、いろいろな意味で、今、世界中から注目されている。

放射性物質は一八九八年、ポーランド人のキュリー夫人によって発見された。当時ロシアに占領されていた祖国ポーランドにちなんで、ポロニウムと名付けられた。キュリー夫人の祖国への思い出は、今もポーランドの人たちの誇りだと思う。その発見は、人類に急激な素晴らしい進歩をもたらした。レントゲンやがん治療、植物の品種改良、医療器具の滅菌、半導体の製造など私達の暮らしを特別レベルアップしてくれた素晴らしい発見だと思う。

私は、六年生のときに夏休みのセミナーに参加して、直接放射線を見たことがある。真っ暗な所で、石から飛び出して光りを放つその姿はとても美しかった。まるで、生き物のように、線香花火のように飛び出してくる美しい光だった。神秘的だった。あんなに美しく神秘的な放射線だが、取り扱いを間違うと有毒なものになる。ものには使い方によっては役に立ち、時には自分に害を与える武器と化す。諸刃の刃そのものだ。

日本の原子力発電所は、一瞬の天災によって、私たち人類、そして、自然までもおびやかす武器と化してしまった。決して武器にするなど誰も、考えもしなかったと思う。人々の役に立ちたい、日本の産業をもっと強いものにしたい、日本をもっと豊かにしたいと、国を挙げて考えに考えた結果の原発だった事は、私にもとてもよく理解できる。しかし、最終的にはそれがすべて、武器となって、日本を襲うことになってしまった。

キュリー夫人は特許を取ることは、科学の精神に反することだからと言いラジウムの作り方の特許をとらなかった。とても貧しかったキュリー夫人なのに、大金持ちになれたはずなのに、それをしなかったキュリー夫人の科学に対する思いは、決して科学を私利私欲に利用してはならないという強いメッセージのように、私には受け取れた。すべての研究を人類のためと考え、個人の利益にしなかったキュリー夫人を、心から尊敬する。人類の為に自分の命もかけながら研究を続けたキュリー夫人の発見を私たちは決して、私たち自身に向けた武器に変えてはならない。人類の為になるための研究をもっともっと続けるべきなのだと強く思う。キュリー夫人の根底にある大きな愛を受け継いでいかなければならない。

自然と学問と家族をそして、祖国ポーランドを愛し、自分一人だけの利益を考える気持ちを持たなかつたキュリー夫人。化学の進歩のためにつくした人生を素晴らしいと思う。だから、彼女は二度もノーベル賞を受賞することができたのだろうと思う。また、彼女の家族だからこそ、その遺志は引き継がれ、家族までもがノーベル賞を受賞したのだ。同じ女性としてとても誇りに思う。

私も、自然を愛し、家族を愛し、日本を愛し、人のためにつくせるような仕事をいつか持ちたいと思う。

私たちはキュリー夫人がこしてくれた偉大な優れた遺産を、決して人類の害になるようなものに変えてしまってはいけない。

日本の未来を、美しい自然にあふれた未来に戻せるよう、日本の化学と技術の最善をつくして、日本に再びおとずれるはずの安全と平和と繁栄を取り戻して欲しい。そして、それは、今、世界中の人々が注目している事である。

日本だからこそできる最善を祈っている。

そして、それこそ、キュリー夫人が一番に願っていることだと思う。

優秀賞 中学生部門

これからの「化学」

野師本 桃子(小矢部市立石動中学校)

私は「化学」について考えてみようと思い、BL出版の「マリー・キュリー」(フィリップ・スティール著、赤尾秀子訳)を読んだ。マリー・キュリーはポーランドに生まれ、小さいころから活発でとても賢かったという。家もあまり豊かとは言えず、母国も危ない状況の中、「ラジウム」という物質を発見したことは、普通の人ではできなかつた、逆に言えばキュリー夫人だからこそできたことなんじゃないかと思う。

私は小さい頃から今まであまり「化学」というものを知らなかつた。また化学が私達に対してどれだけの影響を及ぼしているかということも分からなかつた。しかしマリー・キュリーの人生を詳しく探つてみると「化学」というのは人類にとってとても大切な存在であることが分かつた。

またキュリー夫人が発見したのは私もよくしっていた「放射能」だ。私のイメージでは「恐ろしい」という感じだが、実際はガンや体内を透かしてみると役立つっていることも知つた。

しかし、放射能は使い方を間違えば兵器になてしまうこともある。日本は唯一の被爆国で放射能の影響は計り知れない。爆弾にして悪用しようとする人達は本当の使い方を知らないのではないか、と思う。放射能を正しく自分達のために活用することを次世代に伝えていくことが私達の本当の「課題」だと思う。

キュリー夫人は女性だからという理由でノーベル賞受賞対象からはずされるところだったという話もあつた。日本でも昔から男尊女卑の風習があったという歴史は小学校の社会科で習った記憶がある。女性からの立場では男性と同じように化学を学んだり、発見したりしたいという思いがあるのなら世界全体で性別や年齢、国籍を問わず皆が平等に活躍できるようにするのも私達の仕事なのではないかと思った。

「化学」とは物質の変化について研究することだという。この世の中は物質によって成り立つてゐる。その物質について私達が理解しようとすれば、未来を現在よりももっとよりよく出来るのではないかと思う。そうするためにまずは自分達が化学に興味をもち、追求することで後の世代につなげていくことが大切になってくると思う。

自分が生活していくうえで、疑問に思ったこと、知りたいと思ったことは惜しまず調べてみることで化学に関する課題を見つけることができるし、その物質についても見なおすことも可能なので私自身もそうだが、今の若い人達の間であまり聞いたことのない「化学」についてもう一度見直してみる必要があると思う。

私の場合、有名な化学者マリー・キュリーを知ったことで化学に対する関心が持てた。このことから、マリー・キュリーなどの伝記を、子供達に積極的に提供することも一つの方法なのでは、と思った。好奇心旺盛な子供達だからこそ分かるようになる場合もたくさんあると思うので、小中学校の図書館、あるいは書店に伝記(特に化学者などの)を置くことで化学に親しむ機会が増えるのではないかと思う。また伝記を低学年にも対応するものを作るとても良いと思う。

これから未来を造りあげていくのは私達で、良いものにするか、悪いものにするのかも自分達にかかっている。だから、化学の力を見直し、兵器にするために使うのではなくて、病気の早期発見や治療する上での正確な位置判断などで活躍できるよう導くのも私達の重要な役割だ。私も歯科医に行ったとき、乳歯と永久歯を見分けるとき、X線を当てレントゲンを撮った経験がある。つまり放射能は日常生活に無くてはならない存在だということだ。そういうことも考えると化学というのはからの社会を造っていくなかで必要不可欠なものであることが分かつた。

あえてマリー・キュリーは放射能、ラジウムを発見しても特許をとらなかつた。それは世界の人に自由に使ってもらいたかったからだという。そんなキュリー夫人の配慮もあると知って私は悪用してなどいられない、もっといろんな人に良い影響を与えてほしいと強く感じた。私達が将来世の中をひっぱっていくとき、化学のすばらしさを発見しキュリー夫人が残してくれた放射能の使用法を、化学の大切さを世界の人々に伝えつないでいく事が自分達に与えられた大きな「使命」なのではないか。

3.3 駐日ポーランド大使館での感想文コンクール表彰式

キュリー夫人はポーランドで生まれ、大学入学前までの教育も首都ワルシャワで受けられました。その後のパリでの研究への研鑽は、少女時代のポーランドでの勉学ぶりが基礎になっています。日本化学連合の感想文コンクールの企画を知られた駐日ポーランド大使のご厚意で、入賞者の表彰式を大使館で挙行することを申し出て下さいました。表彰式は8月3日(水)午後1時より大使館ホールにおいて開催しました。会場には受賞者親子合わせて約80名と来賓約40名が出席しました。ノーベル化学賞受賞者の野依良治先生とポーランド共和国ヤドヴィガ・ロドヴィッチ・チェホフスカ特命全権大使より祝福と激励の言葉が贈られました。表彰式ではまず最優秀賞として小学生部門、中学生部門各1名ずつ、優秀賞として小学生部門2名、中学生部門3名は表彰されました。その他に、日本化学連合からは入賞者全員に賞状と副賞が贈られました。また、ポーランド大使賞として、賞状と入賞者全員に副賞が、(独)科学技術振興機構からは入賞者全員に副賞が贈られました。化学工業日報社からは、側島レンさんと高裕美子さんのお二人に化学工業日報賞が贈られました。

表彰式に続いて、ピアノ演奏や化学実験ショーなどの催しの後に、レセプションが開かれ、受賞者親子は野依先生、ポーランド大使、招待客らと懇談し、楽しいひと時を過ごしました。

世界化学年記念 「キュリー夫人科学伝記読書感想文コンクール」表彰式次第

日時：2011年8月3日 午後1時より

場所：駐日ポーランド共和国大使館ホール

司会 小松隆之(東京工業大学 教授)

開会の挨拶 御園生 誠(日本化学連合 会長)

コンクール選考経過および結果報告 蟻川 芳子(日本女子大学 学長)

賞状 副賞 授与

祝 辞 野依 良治(理化学研究所 理事長)

祝 辞 ヤドヴィガ・ロドヴィッチ・チェホフスカ(駐日ポーランド共和国 大使)

祝 辞 廣井 卓思(世界化学年大使 東京大学)

ピアノ演奏 亀井 綾乃(曲目:ショパン ノクターン他)

化学実験ショー 池本 黙(都立大学名誉教授) 齊藤 幸一(開成学園 理事)

マリー キュリー アクションの紹介バーバラ ローデ(欧州連合代表部 科学技術部長)

マリー キュリー ポスター展示会の説明

挨 拶 北澤 宏一(科学技術振興機構 理事長)

挨 拶 織田島 修(化学工業日報社 社長)

野依先生とチェホフスカ大使の祝辞の抜粋を(独)科学技術振興機構の機関誌 Science Window, 2011 年 10・11 月・54 卷 4 号 33 頁より引用します。



祝辞を述べられる野依良治 理化学研究所 理事長

野依良治先生の祝辞

皆さんはキュリー夫人の伝記を読み、感動と憧れを抱いたのではないでしょか。どうかその気持ちをこれからも大切にしてください。自分も憧れの人になりたい、少しでも近づくために頑張ろうという気持ちがわいてくると思います。3月11日の東日本大震災以来、私たちの国は大きな困難の中にあります。原子力発電所事故が起き、放射線被ばくが問題となっていますが、これも正しく恐れる必要があります。キュリー夫人はこんなことを言っています。

「人生に恐れるべきものは何もありません。ただ、理解されるべきものがあるだけです。そして私たちの恐れがより小さくなるように理解を深めるときなのです」恐れを感じるものに出会っても、その正体をきちんと理解すればおのずと正しく対処する道が開けると信じています。これから社会、世界を担う皆さんはできるだけ大きな目を開き、広く心を開いてほしいと思っています。



祝辞を述べられるヤドビィガ・ロドビィッチ・チェホフスカ大使

ヤドビィガ・ロドビィッチ・チェホフスカ大使の祝辞

キュリー夫人は、たゆまぬ向上心、努力、勇気、科学と仕事への献身を象徴する存在です。この偉大なポーランド人女性は教育、科学、平和の精神を世界に訴えたばかりでなく、女性の権利平等にも貢献しました。日本でこのようなコンクールが開催され、実に多くの小中学生が参加し、しかも受賞者の半数以上が女性だったことをキュリー夫人が知ったなら、どれほど喜んだことでしょう。

3.4 キュリー夫人科学伝記読書感想文コンクール表彰式の様子

(平成 23 年 8 月 3 日、駐日ポーランド共和国大使館)



受賞者・関係者記念写真



御園生会長挨拶



蟻川選考委員長報告



最優秀賞授与(小学生・側島君)



ポーランド大使賞授与(中学生・金生君)



科学技術振興機構賞授与



化学工業日報社賞授与



祝辞:世界化学年大使・廣井さん



ピアノ演奏:亀井さん



化学実験ショー・池本先生



マリー・キュリーポスター展示会



International Year of
CHEMISTRY
2011

世界化学年記念 化学コミュニケーション賞

応募期間

2011年4月11日(月)～6月30日(木)

世界化学年を記念して、
化学コミュニケーション賞を創設し、
「化学」に対する社会の理解を深めることに貢献した
個人及び団体を顕彰し、
その栄誉を称えることに致しました。
奮ってご応募いただけますよう
お願い申し上げます。

化学コミュニケーション賞

対象業績 わが国において、化学・化学技術に関する社会への啓発活動、情報発信を通じ、「化学」に対する社会の理解を深めることに貢献した業績

応募資格 「化学」に対する社会の理解を深めることに貢献した個人及び団体とする。但し、1つの応募に対して、3名または3団体以内とする。

表彰件数 2件以内とする。状況により、若干の審査員特別賞を設けることがある。

顕彰方法

- (1) 賞記(盾)および副賞をもって表彰する。表彰式は化学工業日報社が主催し、日本化学連合が後援して開催する10月28日(金)の講演会・シンポジウムにて行う。
- (2) 受賞者およびその業績は、化学工業日報社が発行する媒体および日本化学連合のホームページにおいて広報する。
- (3) 日本化学連合および化学工業日報社が主催、共催または後援する講演会・シンポジウムで受賞講演していただくことがある。

応募要領 (1)自薦または他薦による。

(2)応募提出資料

- ①化学コミュニケーション賞応募・推薦書
 - 概要(背景、主要業績とその意義など)(A4用紙にて0.5枚以内)
 - 業績内容(A4用紙にて1.5枚以内、図表を含む)
 - を含む。
- ②業績を記載した資料5点以内。ビデオ・DVD等の記録媒体も可とする。

化学コミュニケーション賞応募・推薦書は、下記よりダウンロードして作成して下さい。

<http://www.iyc2011.jp/prize-j.html>

②の資料は必要に応じ添付して下さい。必須ではありません。

(3)応募期間:2011年4月11日(月)～6月30日(木) 消印有効。

(4)応募書類の提出先

応募書類は、ハードコピーで下記に郵送して下さい。

〒101-0062 千代田区神田駿河台1-5 化学会館3F

一般社団法人日本化学連合事務局 化学コミュニケーション賞係

選考方法 選考委員会を日本化学連合内に設け選考する。

個人情報 応募に当たって得られた情報は、結果の公表や通知に限って使用させていただきます。

世界化学年に賛同する27団体

安全工学会 新化学技術推進協会 化学工学会 化学情報協会 クロマトグラフィー科学会 光化学協会 高分子学会 錯体化学会
 色材協会 触媒学会 石油学会 石油エネルギー技術センター 繊維学会 電気化学会 日本エネルギー学会 日本化学会
 日本化学工業協会 日本化学連合 日本ゴム協会 日本セラミックス協会 日本地球化学会 日本表面科学会 日本分析化学会
 日本薬学会 日本油化学会 表面技術協会 有機合成化学協会



4 世界化学年記念「化学コミュニケーション賞」

主催 一般社団法人 日本化学連合

共催 化学工業日報社

協賛 (独立行政法人)科学技術振興機構

後援 文部科学省 経済産業省、世界化学年日本委員会 全国都道府県教育委員会連合会、

科学新聞社 産経新聞社 毎日新聞社 読売新聞社

世界化学年記念「化学コミュニケーション賞」に際しては上記団体に共催、協賛、後援のご支援を仰ぎ、特に (独)科学技術振興機構 化学工業日報社 には企画の段階から特段のご援助を賜ったことを心より御礼申し上げます。

化学工業日報社によって 2011 年 12 月に刊行された「化学コミュニケーション」の中で、本会会長 御園生誠は「科学コミュニケーションとは、科学者と科学者でない一般市民(専門が同じでない化学者も含まれる)との科学に関するコミュニケーションである。科学と社会の間のコミュニケーションといつてもいい。」と述べています。その目的は、一般市民と科学者が、お互いに情報や意見を交換し、科学に関わる問題について、知識と考え方を共有することあります。ところで、化学コミュニケーションとは、科学コミュニケーションのうち化学の色合いが濃いものであるとも御園生は述べています。

これらの考えに基づいて日本化学連合は「化学コミュニケーション賞」を企画致しました。この賞はわが国において、化学・化学技術に関する社会への啓発活動、情報発信を通じ、「化学」に対する社会の理解を深めることに貢献した個人および団体の業績を顕彰するものです。

4.1 事業実施 概要

本事業の企画・実施・運営のため以下のワーキンググループ委員が選任され活動を開始した。

「化学コミュニケーション賞」ワーキンググループ委員

| | |
|-----|--------------------------|
| 委員長 | 小林 憲正(横浜国立大学工学研究院教授) |
| 委 員 | 中井 武(日本化学連合副会長) |
| 委 員 | 内山一美(首都大学大学院都市環境科学研究科教授) |
| 委 員 | 若林文高((独)国立科学博物館研究主幹) |
| 委 員 | 安永俊一(化学工業日報社出版局長) |

「化学コミュニケーション賞」は本年 4 月 1 日(月)より 6 月 30 日(木)までの期間に募集を行い、28 件の応募がありました。これらの応募案件全てに予備選考を行い、下記の最終選考委員によって、本選考が行われました。予備選考並びに最終選考に当たられた委員の方々は以下の通りです。

「化学コミュニケーション賞」予備選考委員

| | |
|-----|----------------------------|
| 委員長 | 小林 憲正(横浜国立大学工学研究院教授) |
| 委 員 | 中井 武(日本化学連合副会長) |
| 委 員 | 内山一美(首都大学大学院都市環境科学研究所教授) |
| 委 員 | 若林文高((独)国立科学博物館研究主幹) |
| 委 員 | 安永俊一(化学工業日報社出版局長) |
| 委 員 | 伊藤 卓(横浜国立大学名誉教授) |
| 委 員 | 青山聖子(サイテック・コミュニケーションズ) |
| 委 員 | 内田麻里(サイエンスライター) |
| 委 員 | 柄山正樹(東洋大学生命科学部教授) |
| 委 員 | 渡辺政隆((独)科学技術振興機構科学ネットワーク部) |

「化学コミュニケーション賞」最終選考委員

| | |
|-----|------------------------|
| 委員長 | 伊藤 卓(横浜国立大学名誉教授) |
| 委 員 | 織田島 修(化学工業日報社 代表取締役社長) |
| 委 員 | 北野 大(明治大学理工学部教授) |
| 委 員 | 小林 憲正(横浜国立大学工学研究院教授) |
| 委 員 | 瀬田 重敏(東京農工大学客員教授) |
| 委 員 | 中井 武(日本化学連合副会長) |

下記 4 件(化学コミュニケーション賞;個人)、化学コミュニケーション賞;団体、各 1 件および審査員特別賞 2 件)を選考し表彰しました。受賞者を以下に紹介します。

● 化学コミュニケーション賞(個人)

受賞者:佐藤 健太郎 (東京大学大学院理学系研究科化学専攻)

業績の課題:『ウェブ・書籍などを通じた化学コミュニケーション活動』

選考理由:有機化学・創薬化学分野での独自性の高い出版並びに Web の活用を含めた、広範かつ精力的なコミュニケーション活動を高く評価する。どちらかというと専門家向けに偏りがちな内容を、受賞者の化学コミュニケーションに対する強い熱意を持って、様々なツールを活用することで、中学生から専門家まで幅広い層への展開を図っていることも、評価に値する。

● 化学コミュニケーション賞(団体)

受賞者:株式会社クラレ

業績の課題:『20 年に及ぶ「少年少女化学教室」の実践』

選考理由:企業の CSR 活動の一環として、地域社会との調和のとれた共生を目指して、およそ 20 年にわたって継続されている社員のボランティア参加による、小学生を対象とする地道な化学コミュニケーション活動を高く評価する。活動地域も開始当初の倉敷からその後数を増やし、現在では全国 5 事業所に拡張していることも評価に値する。

● 審査員特別賞

受賞者:戸谷 義明 (愛知教育大学理科教育講座化学分野)

業績の課題:『化学の普及と大学授業とを両立させる出前化学実験』

選考理由：教育系大学教員の立場で、子供のみならず幅広い層への出前化学実験などの独自性の高い啓発活動の積極的な実践を評価する。ボランティアの学生と協働することで、コミュニケーター育成の視点も取り入れた活動である点も評価される。

● 審査員特別賞

受賞者：藤井 豊、浅原 雅浩、田中 幸枝の（福井大学 医学部／教育地域科学部／医学部）

業績の課題：『分子模型教材による化学コミュニケーションの推進』

選考理由：独自に開発した分子模型教材の活用を志向した、地域密着型の多彩なコミュニケーション活動。10年に及ぶ活動実績があり、コンピュータ画像に頼りがちな現在において、自分の手で作る分子模型のもたらすリテラシー効果に期待するところは大きい。

4.2 化学コミュニケーション賞表彰式

表彰式は学術総合センターに於いて開催された世界化学年「記念シンポジウム」（10月27日～28日、化学工業日報社主催）のプログラムの一環として、10月28日に受賞者の記念講演も含めて挙行しました。受賞者には賞記と副賞が贈呈されました。

世界化学年記念 化学コミュニケーション賞 表彰式次第

日時：2011年10月28日（金）午後2時～3時

場所：学術総合センター（千代田区神田一ツ橋）

司会：小林 憲正（横浜国立大学）

- | | |
|-------------|------------------------|
| 1.主催者挨拶 | 御園生 誠（日本化学連合 会長） |
| 2.選考経過・結果報告 | 伊藤 卓（選考委員会委員長 横国大名誉） |
| 3 表彰盾、副賞授与 | プレゼンター：御園生 誠；日本化学連合 会長 |

化学コミュニケーション賞（個人）

佐藤 健太郎（東京大学大学院理学系研究科化学専攻）
『ウェブ・書籍などを通じた化学コミュニケーション活動』

化学コミュニケーション賞（団体）

株式会社クラレ
『20年に及ぶ「少年少女化学教室の実践』

審査員特別賞

プレゼンター：中井 武；日本化学連合 副会長

戸谷 義明（愛知教育大学理科教育講座化学分野）
『化学の普及と大学授業とを両立させる出前化学実験』

藤井 豊・浅原 雅浩・田中 幸枝（福井大学 医学部／教育地域科学部／医学部）
『分子模型教材による化学コミュニケーションの推進』

4. 化学コミュニケーション賞受賞者講演

佐藤 健太郎（東京大学大学院理学系研究科）
高田 大輔（株式会社クラレ）

4.3 化学コミュニケーション賞 表彰式の様子

(2011年10月28日、於:学術総合センター)



御園生誠会長の挨拶



伊藤卓選考委員長の結果報告



「化学コミュニケーション賞」個人
佐藤 健太郎 氏(東京大学大学院)



「化学コミュニケーション賞」団体
株式会社クラレ(代表 福盛 孝明 氏)



「審査員特別賞」
戸谷 義明 氏(愛知教育大学)



「審査員特別賞」
藤井 豊 氏、浅原 雅浩 氏、田中 幸枝 氏(福井大学)

受賞者講演



佐藤健太郎氏(東京大学大学院理工学研究科)



高田大輔氏(株式会社クラレ)



受賞者記念撮影

ノーベル化学賞受賞者の 白川 英樹 先生(前列右より2人目)が記念撮影に参加して下さった。

編集後記

2008年末に開催された第63回国連総会にて、"Chemistry –our life, our future"を統一テーマとして、2011年を「世界化学年」と定め、世界各国が連動して化学に関する啓発・普及活動を行うことを決定しました。この活動には、①化学に対する社会の正しい評価と理解の増進、②若い世代の化学への興味の喚起、③創造的未来への化学の強い興味の創成、④女性の化学における活躍の場の拡大、などを目的としています。また、2011年はキュリー夫人のノーベル化学賞受賞から100年目に当たります。日本では、世界化学年日本委員会(委員長:野依良治 理化学研究所理事長)のもと、活動に賛同する化学系学協会・各種団体が年間を通して多くの記念行事を企画開催いたしました。

一般社団法人日本化学連合は「世界化学年日本委員会」の事務局を担当するとともに主催事業として2010年12月に「世界化学年カウントダウン記念シンポジウム」を、2011年8月に「キュリー夫人科学伝記読書感想文コンクール」を、そして2011年10月に「化学コミュニケーション賞」を主催し、化学に対する社会の理解の増進と若い世代の化学への興味の喚起に努めてまいりました。

本報告書は、世界化学年会期中、日本化学連合が主催した上記三つの事業をまとめたものです。

主催した事業の実施に際しては、日本化学連合会員の17学協会ばかりでなく、その他、多くの方々のご尽力を頂きました。特に化学連合前担当部長の内野圭司氏には、企画と事業立ち上げの段階でご尽力頂きました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

2012年3月

一般社団法人 日本化学連合
常務理事 濑川幸一
事務局長 石田 裕

日本化学会
世界化学年 2011 記念事業報告書

2012 年 3 月 発行

発行者：御園生誠

発行所：一般社団法人 日本化学会

101-0062 千代田区神田駿河台 1-5 化学会館 3F

電話：03-3292-6010

URL：<http://www.jucst.org>
